

カトリック 仙台教区報

No.249 2023年4月9日

発行: カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12
Tel.(022)222-7371 Fax.(022)222-7378
発行責任: 仙台教区広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>



ご復活 おめでとうございます

仙台教区司教 ガクタン エドガル

主は皆さんとともに

「またあなたとともに」という皆さまの返事が聞こえるような気がします。

子どもとして、この司祭と会衆との対話はじめて感動したのは小学校を卒業する前のある日、主の奉獻の祝日のミサではじめて侍者をした時でした。その意味で、1977年2月2日は、わたしの司祭召命が芽生えた日、この司祭との出会いや関わりはわたしの召命の始まりでした。

わたしの小教区の教会は町にありますが、町の周辺の幾つかの村にもそれぞれチャペルがあります。この小教区には主任司祭のほか助祭司祭がいないので、司祭1人が土曜日、2つないし3つのチャペルで主日ミサを司式していました。ミサ祭具の用意はわたしたち侍者の仕事でした。主日ミサ以外、葬儀や結婚式もあるので、侍者団長が最終的に祭具の準備をチェックします。ある日、最後のミサが始められる前、ミサ典礼書を前の教会に置いてきたことに気づきました。

神父はわたしが通っていたカトリック学校の校長もありました。「激怒神父」と呼ばれるほど厳しい校長でした。ミサになくてはならない本を忘れてしまったことは当然神父を怒らせる、そう思っていたわたしともう1人の侍者は雷のような怒りを待っていました。しかし、神父は何事もなかったかのようにミサの開祭をうなずき、司祭がささげる祈りを本から読んでいたかのように唱えていました。この神父はわたしに司祭になる道順を教えてくれましたが、宣教師

との出会いもあって、わたしは宣教会に入会し、1994年4月23日に司祭叙階の恵みを授かりました。

今年4月29日、17年ぶりに仙台教区司祭が誕生する予定です。ミカエル高木健太郎助祭の司祭叙階はわたしたち教区民にとって大きな恵みであり、喜びでもあります。司祭叙階式で司教が受階者へ述べる訓話にこの言葉があります。

「自分自身が喜びをもって受け入れた神のことばを、すべての人に分け与えてください。そして、神のことばを黙想し、読んだことを信じ、信じたことを教え、教えたことを実行するように心がけてください。」

わたしたちは、司祭に限らず、この司祭にかけられる訓話の言葉を実践する人と出会うのです。わたしたちの状況を配慮してわたしたちに神の言葉を伝えてくださる人。その人は、必ずしも何かをするわけではありません。ただ、わたしたちとともにいるのです。

「主は皆さんとともに」。「またあなたとともに」。これは神聖なる友情の表現なのです。主イエス・キリストは多くの驚くべき方法で、時には匿名的な形でわたしたちのところにやって来られます。恐怖という閉ざされた扉を通ってくる主。わたしたちの心に語りかけてくる声としての主。主はわたしたちの前に姿を現します。主は本当に生きておられ、わたしと共におられるのです。

ご復活おめでとうございます。

新地区制について

仙台教区兄弟姉妹のみなさま

今年、わたくしは初めて年頭書簡を発表いたしました。書簡では仙台教区の宣教司牧体制の再編成と新たな出発に触れ、今年度、現在の8地区を5地区に縮小し、これらの地区の小教区は、グループ分けして「ブロック」になる予定と書きました。その後、何人かの方が、これについて感想を聞かせてくださったり、お手紙などで、ご意見をくださいました。お寄せくださった反応を大変うれしく思っております。

2020年3月仙台教区司教座が空位になった時、使徒座管理者であった小松神父が8地区を代表する司祭たちと定期的に集まり、教区の宣教司牧に関わることを諮詢していました。わたくしが着座してから同じ司祭たちと仙台教区で2014年度から導入されてきた「地区制による司祭派遣」を評価してまいりました。神父さま方からの意見では、「地区割り」と「司祭派遣方法」の見直しを望む声が多数ありました。また、司教に叙階されてから、わたくしが教区内のほとんどの小教区を訪問する中で、多くの信徒の方々から寄せられた意見は次のようなものでした。「小教区の相談事や個人的な相談などを地区内のどの司祭に尋ねて良いのか。地区長司祭なのか、担当司祭なのか分からぬ」といった意見です。これらの意見は、昨年の始めにシノドスのために行った信徒向けのアンケートの結果とも重なります。

このようにして、神父さま方からも、信徒のみなさまからも、わたくしは従来の地区制の改善に対する要望の声を受け取りました。そこで、新しい地区割を導入することで、地区に派遣された司祭の責任の所在をはっきりさせ、信徒の皆さんとのまどいを解消し、小教区運営を担当司祭と共に十全に行えると考えました。

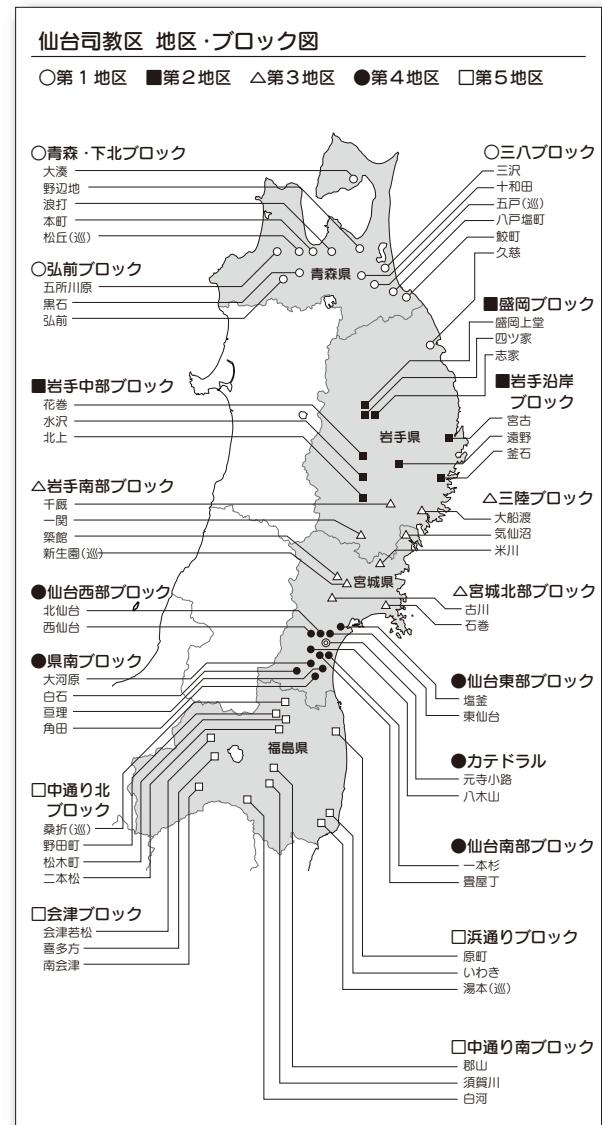
ブロックに派遣された司祭は、そのブロックに関わる課題の相談窓口であり、責任者でもあります。年頭書簡に記したように、責任者である担当司祭が小教区あるいはブロックの集まりの中で、家庭のメンバーと一緒にになって、父である神の導きに信頼し、共に祈りながら、夢や悩み、希望について話し合っていくという期待を改めて表したいと思います。

今回の派遣では、ほとんどのブロックに1人の司祭を送ることで精いっぱいでした。しかし、第1地区の三ハブロックには2人の司祭を送ることができました。2人の司祭に本来の共同宣教司牧が行われることを願うとともに、今後の司祭派遣で、複数の司祭を特に小教区の多いブロックに派遣できるように希望しています。

この新しい地区割と司祭派遣が神さまの祝福に満ち、小教区でも、ブロックでも、地区においても、わたくしたち仙台教区が、心も思いも一つにして神の家族になることを、祈り願っております。

カトリック仙台教区教区長
ガクタン エドガル

※新しい地区制が始まるにあたり、2023年2月2日
主の奉獻の祝日に発表されたガクタン司教の書簡を
再録しました。



「新しい創造」への歩みの中での「出会い」に感謝！

東日本大震災から12年が経過しました。

あの大津波で大船渡は壊滅的な被害を受けました。大船渡教会は地震による被害はほとんどなかったものの、5人の信者仲間が津波の犠牲になり、幼稚園バスの車庫と納骨堂が流失してしまいました。納骨堂に安置してあった12人の方のご遺骨が流されて、どこへ行ったか分からなくなりました。途方に暮れていた時、全国から全世界から救いの手が差し伸べられ、日本のカトリック教会は一致団結、オールジャパンの体制で被災地支援をスタートしました。被災地に8つのボランティアの拠点(カリタスベース)を作り、ボランティアに来てくださった方々は被災地の方々に寄り添うさまざまな活動を続けてくださいました。

仙台教区の平賀司教様は「新しい創造基本計画」を発表なさいました。私は大船渡教会の信徒として、カリタス大船渡ベースのスタッフとして、震災からの復旧復興の、そして「新しい創造」の最前線で活動しています。その基本計画の中で平賀司教様は、被災地と被災した人々、特に「谷間」に置かれた地域やそこに暮らす人たちに寄り添うことを望まれました。また、2019年11月に来日されたローマ教皇フランシスコは「一人で復興できる人はどこにもいません。誰も一人では再出発できません。展望と希望を回復させてくれる友人や兄弟姉妹との出会いが不可欠です。」と仰いました。その言葉に私たちは励まされ、活動を続けています。そしてその計画は今、ガクタン エドガル司教様が引き継がれ、現在に至っています。

この12年間、過ぎてしまうとあつという間だったようにも感じます。しかし、この間の教会の変化、ベースの活動、被災地の復旧復興を思うと、ものすごく長く、重く、貴重な12年間だったと今感じています。

大船渡や隣の陸前高田にたくさんの外国人がいることがわかって、仙台教区は他の修道会に神父様を派遣してくださるように依頼しました。



淳心会日本管区はフィリピン人とインドネシア人の神父様を送ってくださいました。大船渡教会に外国人司祭が常駐するようになると、さらに多くのフィリピン人信者が集まり、ミサに来るようになりました。私たちは、このフィリピン出身の人たちを外国人扱いしないことを決め、私たちの地域に嫁いできた大切なお嫁さんとして接しようと話し合いました。ミサの中で日本語での聖書朗読もお願いしました。日本語の「主の祈り」の後にタガログ語の「アマナミン」もいっしょに歌いました。教会委員会のメンバーとして会議にも参加してもらっています。震災前には長い間なかった洗礼式や初聖体式が行われるようになりました。これからの大船渡教会を担っていくのはこの子どもたちなのです。大阪の堺教会、東京の成城教会が姉妹教会になってくださいり、交流が続いている。震災で失ったものはとても多かったけれど、それをきっかけに得た「出会い」もとても多く、とても感謝しています。



成城教会の皆さんと

信徒の半数をフィリピン出身の母親とその子たちが占めるようになって、大船渡教会は大きく変わりました。言語の違い、文化の違いを乗り越えて、新しい教会を創造していくかなければならないと感じています。

菅原 圭一 (大船渡教会)

仙台教区のうごき

ベネディクト十六世名誉教皇への感謝のミサ

2022年12月31日に逝去されたベネディクト十六世名誉教皇は、東日本大震災の時に、いち早く被災者へ心を寄せてくださり、慰めと励ましの言葉をかけてくださる優しさに満ちあふれた愛の教皇でした。

葬儀は1月5日にローマのサン・ピエトロ広場でフランシスコ教皇司式により執り行われ、10日には東京カテドラル聖マリア大聖堂でガクタン司教も共同司式された追悼ミサが行われました。

仙台教区では、1月15日の年間第2主日のミサを、ベネディクト十六世名誉教皇への感謝のミサとしてささげるように各小教区にお願いしました。元寺小路教会においても、ガクタン司教とイグナシオ神父によってささげられ、東日本大震災の感謝と名誉教皇の永遠の安息を祈りました。

関 豊（仙台教区広報委員）
※カトリック中央協議会HP参照



ベネディクト十六世(ヨゼフ・ラッツィンガー)略歴

1927年4月16日 ドイツ生まれ
2005年4月19日 第265代教皇に選出
ベネディクト十六世となる
2013年2月28日 教皇退位
2022年12月31日 ローマにて95歳で逝去

3.11東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ ～ともに復興をめざして～

2011年の大震災から12年経ったこの日、仙台教区カテドラル元寺小路教会大聖堂において、約160人の参列者と共に午後1時半から「東日本大震災犠牲者追悼・復興祈願ミサ」が行われた。主司式は新潟教区長・成井大介司教で、ガクタンエドガル司教、シャルル・エメ・ボルデュック神父、小野寺洋一神父、高木健太郎助祭によって、ミサがささげられました。



ミサの前にガクタン司教が、「成井司教が仙台教区サポートセンターの初代所長として教区の行っていた復興支援に大きな役割を果たして下さいました。司教になってからはじめて仙台教区で3.11東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈

願ミサの司式ですが、震災後、仙台教区に派遣され、復興活動と関わった私は、このように仙台教区長として成井司教と一緒にミサをささげることを不思議に思いながらうれしく思います。」と、成井司教を紹介してくださいました。

説教の中で、成井司教は、「3.11に、隣の教区に住む隣人として何かお手伝いできることがあれば」と申し上げたところ、ガクタン司教から「カテドラルでのミサの司式と説教を」とお招きいただき、感謝しますと始められた。

ガクタン司教は、「皆さんが体験した新しい創造について、ぜひ分かち合ってください」と教区報で述べておられる。

私たちキリスト者は、キリストと結ばれることによって、新しく創造された者なり、人々と神を和解するものとして召されている。キリストにつながることは、洗礼によって行われるのである。ガクタン司教が呼び掛けておられるように、大震災ということを通して、神は私たちに創造の業を担うように招かれた。日常の中で、神がそれを生きるように招いておられるのである。



新潟教区教区長 成井 大介 司教

私たちは12年前の今日、大震災を経験し、絶望、落胆、苦しみ、悲しみを体験した。その経験は、生活の中でどのように受け止められているだろうか。12年前の経験は、そこで止まっているのではない。その経験は、心の深いところに染みわたって、血となり肉となっている。12年前の経験は、その瞬間だけではなく、ずっと続くものなのである。

私は、3月16日に仙台に来たが、そこで見たり聞いたり、壊滅状態になっている地域の状況に、私の心は傷ついた。今でも、パッとフラッシュバックのように出てくる。4月20日か21日のこと、車で石巻教会に向かっていた。大街道を進んでいると、道の脇につぶれた車が積み重なり、ヘドロもある状況であった。そこで赤い真新しいランドセルを背負い、黄色い帽子をかぶった女の子が、両親に連れられて入学式に向かう姿に出くわした。ここに、日常生活があつたのだという気づきとともに、幼稚園と一緒に通っていたお友達がいなくて、この子はどんなに思うだろうかと思い、涙が出た。以来、4月になると、このような子どもたちを見るたびに、フラッシュバックして、涙が出そうになる。心が自分でコントロールできないのである。それを何とか受け止めようとしたことで、心が敏感になったように思う。

教区事務所の2階にサポートセンターがあつたが、そこに、世界中から善意の電話や物資が寄せられていた。その善意はうれしいのだが、それが自分の許容量を超えていた時、人と協力したり、自分が対応できそうにないとき、人に助けを求めるができるようになった。今はできないことは神に委ねて、キリストのこの道を共に歩んでいくことが信じられるようになったのである。

震災当時は必死でガムシャラだった。しかし、自分が次第に変えられて、新しく創造されていった。2年間しかいなかつた私でもそうだったのでから、皆様はもっとそうだろうと思う。

2011年3月11日から、さまざまな壁を乗り越えてきた。教区の壁を越え一緒に歩んできた。教会の内と外を超えて、ボランティアの人々と共に働いてきた。日本人だけでなく、多くの外国人と共に働いた。司祭、修道者、信徒の壁も越え、助ける人と助けられる人の壁も打ち壊された。はじめは被災者を助けるための支援が、共に生きるため、どれだけ寄り添うことができるかに変わっていた。

ボランティアのリピーターさんの中に、女子高校生の2人組みがいた。あるとき、時間もお金もかかるのに、なぜと聞いてみたら、その答えは「ウーン、おばあちゃんの家に会いに行くようなものだから」という答えであった。その高校生たちは、人を助けるためではなく、ただ大切な人に会いたくて来ていたのである。

フランシスコ教皇が日本の被災者との集いの中で言られた言葉を思い出す。「1人で復興できる人はいません。友人、兄弟姉妹が不可欠です」と。

東日本大震災では、共に歩み、希望と展望を育んでいくキリスト者の歩みであったが、これは、仙台教区だけのことではなく、日本の教会全体がシノドス的に歩んできたということだ。私たちの目標は、共に生きること。時を重ねるほどキリストが私たちの内に浸透し、私たちが新たに創造されるのだ。「最も小さい人にしたことは、私してくれたこと」というこのイエスのことばは、今、困難の中にいる人と共に、イエスがおられるということである。神が私たちをこのように導いてくださるように願おう、と締めくくられた。



共同祈願では、今も石巻ベースで活動を続けているカリタス仙塩の人々が祈りをささげた。

聖体拝領が終わった後、2時46分の鐘を合図に静かに黙とうをささげた。閉祭では「教区のみなさん、神のみわざ新しい創造を信じて、行きましょう、主の平和のうちに」という祈りで、参列者は励まされ、一致して新たな心で次の一步を踏み出した。

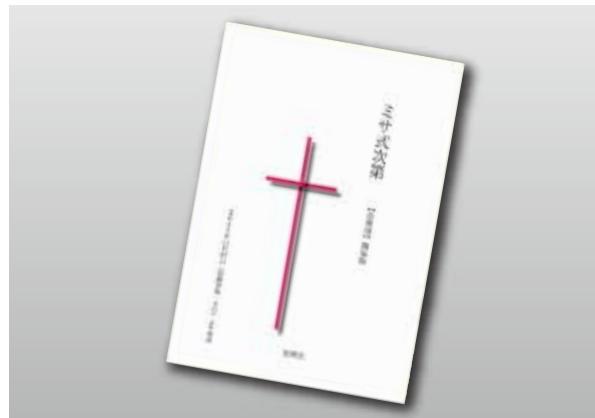
新「ローマ・ミサ典礼書」によるミサ実施に向けて 〈その3〉

「ミサの賛歌」と「ことばの典礼」

昨年11月27日から実施されている「新しいミサ式次第」には、慣れてこられたでしょうか？ところで、そろそろミサの中で聖歌を歌い始めている共同体もあるかと思います。

ミサの賛歌（いつくしみの賛歌、栄光の賛歌、感謝の賛歌、平和の賛歌）にも挑戦し始めている共同体もあるかと思います。昨年の司祭月例会で、仙台教区としては、ミサの賛歌 B(610-614) から練習を始めることと申し合わせました。カトリック中央協議会のホームページには、楽譜と音源が収録されていますので、ご参照ください。

また「新しいミサ式次第」によると、ミサでの第一朗読、第二朗読の後に、朗読者が「神のみことば」と唱え、一同が「神に感謝」と唱えることになっています。聖書の朗読は、ただ単に活字を音に変換することではなく、神ご自身の



言葉を、朗読者が会衆に向かって、信仰をもって宣言することです。朗読者は忘れずに「神のみことば」と唱えてください。なお、福音朗読の後には、「主のみことば」と唱えられ、一同は「キリストに賛美」と唱えることになっています。福音の言葉が主キリストご自身の言葉であることを、明確に示しているのです。

仙台教区典礼担当 森田 直樹 神父

各地区からのお便り

第3地区より

盛岡上堂教会の近況

盛岡上堂教会のミサの参加者は、平均して男性5人、女性10人、合わせて15人程度、その平均年齢は85歳前後。日本全体が「少子高齢化」の大波に包まれ、このままでは滅びてしまいかねない状況にありますが、上堂教会も例外ではありません。

そのような厳しい状況の中には、2021年12月30日(木)、教会の大黒柱であったヨハネ・ボスコ 堀江勝(かつ)さん(堀江節郎神父のご令弟)が帰天されたことは、惜しみて余りあるばかりでなく、教会の活動、運営はどうなるのだろうという不安を覚える大きな出来事でした。

しかし余命の告知を受けていた堀江さんは、愛する上堂教会のために、自分の亡き後のことを行かに、さまざま配慮されて旅立ちました。

盛岡三教会の一つ、私たちの兄姉で日頃からお世話になっている四ツ家教会のSさんご夫妻(元四ツ家教会委員長)に上堂教会のために力を貸してほしいと命がけで依頼、Sさんご夫妻も



これを快諾されて転籍。その後、他の教会からの転入もあって上堂教会の信徒は増え、平均年齢も若返りました。のみならず教会活動も(不肖、教会委員長を仰せつかっている私が言うのは変ですが)滞りなく、どころか立派に行われています。昨年5月22日(日)の教会総会、7月10日(日)のガクタン司教様のお出迎え、シノドスの話し合い、そして集会祭儀に至るまで…。

今後とも信徒の皆様の温かいご支援に支えられつつ、力強く歩んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

黒澤 勉 (盛岡上堂教会)

第5地区より

※「第5地区通信」より抜粋・転載しました。

東仙台教会の特製カレンダー

毎年、お二人の信徒がパソコンとプリンターを駆使してカレンダーを作製してくださっています。1年分がA3の用紙1枚に印刷されていて、主日はもちろん祝・祭日・聖人の記念日、祈願日なども書き込まれています。上部には、



み言葉と写真。2023年の写真は、真っ白く雪が積もった東仙台教会が明るい太陽に照らされてすがすがしい景色です。銀行のカレンダーほど大きくないので、月ごとのカレンダーの横に貼って使っているという声も聞かれます。待降節に入る頃には、丁寧に作られたカレンダーが出来上がり、いよいよ出番を待つことになります。

松本 由美子（東仙台教会）

〈塩釜教会〉

主の降誕おめでとうございます

塩釜教会では12月24日の18時からの夜半ミサに、救い主の誕生を祝うためたくさんの人々がミサにあづかられました。この恵みを人々に来られた方や小さな子どもさんと分かち合い、感謝をささげることができました。



ミサ後、少しの時間でしたが、小さな丸いドーナツがプレゼントされ、皆さん、笑顔がいっぱいでした。祭壇の真紅のバラも優しくお祝いしているようでした。 和賀 真喜子（塩釜教会）

〈石巻教会〉横浜教区から転入しました

横浜教区富士吉田教会から転入してきた佐々木と申します。もともとは石巻カトリック幼稚

園を卒業しまして、私が覚えているお御堂は現在のお御堂とは反対側に建物があった時代です。お盆や正月には帰ってきましたが、教会の周辺など立ち寄る機会がなく、数十年ぶりに見る景色はまるで浦島太郎の気分です。時代の流れやあの未曾有の大災害の影響もあるかと思いますが、駅前・港・イオン周辺などの変化に大変驚いています。

富士吉田教会所属時代は、仕事の関係で活動などにあまり貢献できませんでしたが、今はフリーになったので、できることがあれば何なりおっしゃってくださいさればお手伝いしたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。



初めて迎える石巻教会でのご降誕祭を喜びとともに、皆さまの上に主のお恵みが十分に注がれますようお祈りいたします。

佐々木 清美（石巻教会）

第6地区より

〈元寺小路教会〉

待降節始まりの祈りのつどい

毎年、待降節が始まると大聖堂入口の上に大きなご降誕の絵が掲げられています。

今年は、これから始まる待降節を祈るつどいと教会外の皆さんに向けてのご降誕の絵のライトアップを開催しました。

11月26日(土)夕方5時から、大聖堂の前でオルガンの演奏と聖歌によるつどいの式が始まりました。イグナシオ・マルティネス神父の司式で、聖書の朗読、共同祈願、神父様のお話と祈り、皆で主の祈りを唱えた後、ターポリンシートのご降誕の絵がライトで照らされました。

コロナ禍や戦争などで世の中が暗く沈んでいる中、大聖堂壁面のご降誕の絵が外に向かって輝き、希望の光のようにも感じられました。



今回は、青年会が協力し、ポール・トー神父やガクタン エドガル司教も参加してくださいましたが、来年度は告知を広めて、たくさんの人人が集う式になればと願っています。

関 育（元寺小路教会）

〈元寺小路教会〉朗読奉仕者研修会



3月4日(土)ミサの中で聖書の朗読奉仕をする方を対象に森田直樹神父のご指導で研修会を開催しました。

今回は近隣の小教区や外国籍の方にも呼びかけ、約50人が参加しました。朗読奉仕は靈的・典礼的・技術的な準備を通して、神の御言葉を伝える大切な奉仕である事を学び、有意義な研修会となりました。 関 育（元寺小路教会）

第7地区より

〈松木町教会・野田町教会〉合同黙想会

12月11日(日)、松木町教会での合同ミサの後、待降節の黙想会とゆるしの秘跡が行われました。福島県内の第7地区・第8地区ではこの日、神父様たちは普段担当されている小教区とは違う小教区へ出向かれて、黙想のご指導をなさいました。松木町教会・野田町教会合同黙想会には仙台からポール・トー神父様（ケベック外国宣教会）が来てくださいり『共同体と信仰生活』のテーマでお話ししてくださいました。

講話の最後に、YouTubeで歌を聞かせてくださいました。それは、先天性四肢欠損症ながらも常に前を向いて、明るく暮らし、歌手としても活動をしている方が歌っています（佐野有美チャンネル／『歩き続けよう』）。その歌を聴きながら、皆それぞれ、辛さや悩み、苦しみ悲しみが胸の内にあるだろうけれど“それでも神様



はいつもそばにいてくださった、今も一緒にいてくださっている”という講話の中の言葉を振り返り、より深く味わったのではないでしょうか。おのおのが待降節を過ごす黙想のヒントをいただいた一日でした。

渡邊 祐子（野田町教会）

〈松木町教会・野田町教会〉聖劇

12月24日(土)主の降誕・夜半の合同ミサ(19時・野田町教会)の前に、教会学校(松木町教会・野田町教会)の子どもたちによる聖劇が行われました。今年は3歳から小学6年生までの12人と保護者2人の合わせて14人が参加しました。小さい子どもが多かったので動きは少なくしてナレーションに合わせて各場面を表現しました。



子どもたちは事前に心の準備をしてから数回の練習を重ねて当日に備えました。真剣な動作の中に子どもらしいかわいらしさが溢れ、見ている私たちは暖かく幸せな気持ちになりました。エメ神父様も大変お喜びでした。ご指導くださいましたシスター安田・シスター江川、お世話くださいました佐久間アリスさん・美谷マリアさん・保護者の皆さんに心から感謝しました。

三浦 久美子（松木町教会）

■会津若松教会からの問い合わせ■

ペトロ 高橋 恵岷（けいみん）の子孫を探しています

明治26年ころ、岩手県盛岡の元僧侶であった高橋恵岷が会津に家族と来て、伝道師としてドシェ師、レイノー師のもとで山口鹿三と共に伝道活動をされました。家族の妻エキ、長男幸太郎、次男ジュンイチまでは盛岡で受洗し、長女トミ、次女チカがどこで受洗したかは不明。恵岷と妻エキは多くの方の代父や代母となっていました。例えば、1893・4年ころ、郡山の井越（女性）、渡辺シンメイ（男性）、渡辺スミ（女性）、渡辺ヨウスケ（男性）、渡辺ヨウシロ（男性）、1903年には福島の畠山熊太郎などがあります。

教会所有の豊岡墓地の恵岷の長男の墓石正面の刻字は「天主僕高橋幸太郎乃墓」、裏面は「主降生千九百四年十月四日没」、「布以 保慈眠待復活榮福」とあります。そして、恵岷家族も1904

（明治37）年を境に教会の記録には何も残っていません。推測するには盛岡に戻ったのではと思われます。

そのお墓はかなり大きく地震で傾き、墓地の塀の土台からの全面改修工事をするのに危険で、墓石屋さんに依頼して寝かせました。塀の工事も終了し、その墓石をどうしようということになり、寝かせただけでもそれなりに費用がかかり、さらに元に戻すにはこれまた多額の費用がかかるので、子孫の方がおられたら相談したいと思います。お心当たりのある方は会津若松教会まで連絡をお願いいたします。

連絡先：会津若松教会 0242-27-1447

笠原 孝広（会津若松教会）

教区の諸活動

鶴ヶ谷墓地 共同墓参・野外ミサ



秋も深まる11月3日（木・祝）、晴天に恵まれてカトリック鶴ヶ谷墓地で仙塩地区8教会共同墓参・野外ミサが行われました。司式は小野寺洋一神父様、仙塩地区の信徒111人が参加しました。久しぶりの再会を喜ぶ人々が目を引きました。

コロナ禍で参加者が少なくなると心配しましたが、多くの人々の笑顔に会えてとても良かったと思います。

当番教会の一本杉、八木山、協力してくださった元寺小路、墓地委員の皆様に感謝します。当日の献金は墓地委員会に寄付しました。簡易トイレを設置しなかったので参加を断念された方もおられたようですが、共に墓前で祈る恵に感謝しています。

野田 和雄（八木山教会）

2022年度 カトリック仙塩地区連合婦人会（あけの星会）黙想会 ～わたしにとって、生きるとはキリストを生きること～



2022年11月24日(木)、元寺小路教会大聖堂においてガクタン エドガル司教のご指導により、あけの星会黙想会が開催されました。3月19日(土)のガクタン司教叙階式は、コロナ禍にあり信徒の出席が限られたことからか、男性信徒を含む100人近くが司教との交わりを求めて喜びの中に参集。まず、黙想会に神の祝福を願い口ザリオの祈りをささげ、司教より提示されたテーマ「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」から、宣教者パウロのお話に聴き入りました。

ガクタン司教は、聖書に記されていないパウロの家族のタルソスへの旅立ち、その地で自由の身となって市民権を得た過程を紹介されました。パウロの外国での生活を想像しながら、自身の外国から日本への旅のエピソードも話されました。そこで司教が「あなたのタルソスはどこですか?」と私たちに問われました。生まれた



故郷への憧れを知っているものとして司教は、パウロのタルソスからエルサレムへの旅の道のりと気持ちをまた想像しながら、外国で育てられた移民たちがルーツを探る体験を紹介しました。パウロの旅の中心の箇所、つまりダマスコの地での主イエス・キリストとの出会いを、この黙想会を通して、より深く味わうことができました。3日間何も見えない中で祈るパウロは、キリストの弟子アナニアの寄り添いと聖霊の恵

みに頼り、生かされる(復活される)意味を体験しました。目が見えるようになったパウロは神のみ心を悟り「主はイエスのみ」と、最期までキリストを生きることを貫いたパウロの生涯を、司教はお話くださいました。神の大いなる愛といつくしみの中でまことの自由を得られ、さまざまな経験をしながら、ゆるぎなくキリストを生きたパウロの信仰の姿を黙想。自分自身のキリストとの出会いや体験を思いめぐらし、いつも主が共に歩いてくださっている喜びに満たされ、賛美と感謝をおささげしました。



続くミサの説教の中で司教は、さまざまな困難を抱えている私たちが今をよりよく生きるためにと、自分が大切にしてきてる5つの生きるコツを紹介され、具体例を話しました。このコツは、何年か前、ある病院のチャプレンの講話で聞かれたそうです。①前向きに生きること。②ユーモアをもって生きること。③感謝して生きること。④趣味をもって生きること。⑤家族の絆を築くこと。私たちが頭を上げ、主に信頼し希望をもって生きていくようにとお導きくださった司教の愛に満ちた笑顔と、温かく優しいお言葉が心に染みました。ありがとうございました。ガクタン エドガル司教の上にいつも神の愛といつくしみがありますように。アーメン。

阿部 正子(東仙台教会)

司 祭 紹 介

イグナシオ・マルティネス

(グアダルペ宣教会)

○生年月日

1962年11月5日

○出身地

メキシコシティ
(メキシコ)

○助祭叙階

1991年3月27日

元寺小路教会
(仙台カテドラル)

○司祭叙階

1992年8月15日

グアダルペの聖母大聖堂(メキシコシティ)



仙台教区の兄弟姉妹の皆さん、主の平和。イグナシオ・マルティネス神父です、よろしくお願ひいたします。

司祭を志したきっかけ

生まれた家族は4人兄弟姉妹の長男です。小学校・中学校はラ・サール会のミッションスクールでしたのでカトリックの明るい雰囲気の中で育てられ、教会との関係も無理なく普通に生きていた子どもだったと思います。

小学生の時は日本のテレビ番組に夢中でした。特に「コメットさん」(九重佑三子)は大人気でした。私の年代のメキシコの子どもたちは、誰でも「コウジ」とか「タケシ」とかの日本人名を知っていると言っても過言ではないと思います。小さい時からぜひ自分の目で日本を訪れてみたくて、日本の味、日本の匂いを体験してみたかった。畳の部屋で布団をひいて寝たり、お箸で食べたりしてみたかったです。でも司祭の道はあまり真剣に考えていませんでした。確かにミサの時に司祭が大きな白い丸いパンを持ち上げる場面は「格好よかつたな」と、いつか自分でやってみたいなと思うぐらいでした(ちなみに侍者の奉仕は神学校に入る前に一度もしたことありませんでした、なぜかというと赤いステンレスを身に着けて人前に立つのが照れくさくてたまらなかったからです)。その当時、学校のチャップレンのような役割をしてくださっていたのはグアダルペ宣教会の神父さんでしたが、アフリカでのミッションの話しか話してくださらなかったような記憶があって、正直にあまりライオンが怖いとかキリンがでっかいとかのお話に興味がありませんでした。しかし、1974年グアダルペ宣教会の創立の25周年の記念のために作られ

た日本人女子の写真付きステッカーを見たときに、初めてグアダルペ宣教会は日本でもミッション活動していることを知りました!! そのとき心に決めました。「日本へ行くために宣教師になりたい」「日本へ行くためにグアダルペ宣教会に入ろう」と決心しました。

「コメットさん」って本当に神様が準備してくださった不思議なきっかけでした。神様のなさるみ業は本当にはかり知れぬものですね。

司祭として大切にしていること

宣教司祭として大事にしていることについてですが、「よろこびをもって生きる」ことですかね。子どもの時から教会は楽しくて誰でも安心して居られる場であることを経験しました。特に子どもの時に明るくて親しみやすい主任司祭がいる教会に通いましたので、神父さんたちは皆楽しい人だと思っていました。もし私が神父になれたら、同じように私が会える人々に少しでも神様の喜びと希望を伝える宣教司祭になればいいのかな、と思いました。しかし毎日良いことばかりあるわけではありません。いつも微笑みができないでも、悲しいなあと思う時があっても、できる限りそういう喜びの心を大切にていきたいと思っております。試練に直面する時、うまく喜びを伝えられないけれども諦めないで前向きにイエス様と皆さんとともに歩んでいく神父でいたいなと思います。

仙台教区の信徒へ望むこと

仙台教区の皆さんに望んでいることは、どんなことがあっても希望を失わないでほしい。父なる神様はいつもともに歩んでくださるからです。皆様が東日本大震災やコロナの感染拡大の苦しみを経験したから、その辛さからたくさん学んだと思います、力を合わせて立ち上がろうとしたことは素晴らしいお恵みだったのでしょう。絶えず聖霊の息吹はわたしたちの仙台教区に吹いています、一人ひとり、司教、司祭、信徒、子ども、大人、老人、女性、男性、各共同体、小教区、修道会、施設、学校、活動団体のメンバーがともに歩み互いに支え合いながら、その考え方、性別、環境、文化、国籍の違いを超えて喜びをもって生きてほしい。神の国の多様性の豊かさを受け入れて、一つの家族としてともに歩んでいる今の素晴らしいお恵みをよろこんでもらいたいと思います。

今後ともよろしくお願ひいたします。

祈りと感謝のうちに

仙台教区本部 教区長：ガクタン エドガル 司教

司教総代理：板垣 勤

教区事務局長：イグナシオ・マルティネス（4月1日付け）

教区会計：小野寺 洋一

地区	プロック	小教区（）は巡回教会	担当司祭（）は所属
第1地区	弘前	弘前、五所川原、黒石	小松 史朗（仙台教区）
	青森・下北	本町、（松丘）、浪打、大湊、野辺地	李 錫／イ ソク（韓国光州教区）
	三八	八戸塩町、鮫町、十和田、（五戸）、三沢、久慈	ギャリー・ゲストベオ（淳心会） パトリック・カストロベルデ（淳心会）
第2地区	盛岡	四ツ家、盛岡上堂、志家、	ポール・トー（ケベック外国宣教会）
	岩手中部	花巻、北上、水沢	マルコ・アントニオ・デラ・ロサ（グアダルペ宣教会）
	岩手沿岸	遠野、宮古、釜石	堀江 節郎（イエズス会）
第3地区	岩手南部	一関、千厩、築館、（新生園）	渡辺 彰宏（仙台教区）
	三陸	気仙沼、大船渡、米川	ロペス・ホセ・アウセンシオ（グアダルペ宣教会）
	宮城北部	古川、石巻	メフィア・タデオ・ラファエル（グアダルペ宣教会）
第4地区	仙台東部	塩釜、東仙台	森田 直樹（京都教区）
	仙台西部	北仙台、西仙台	俞 鍾弼／ユ チョンピル（ドミニコ会）
	仙台南部	一本杉、畠屋丁	ミゲル・ヴァレラ（グアダルペ宣教会）
	カデドラル	元寺小路、八木山	板垣 勤（仙台教区） イグナシオ・マルティネス 協力司祭（グアダルペ宣教会）
	県南	亘理、角田、大河原、白石	小野寺 洋一（仙台教区）
第5地区	中通り北	松木町、（桑折）、野田町、二本松	シャルル・エメ・ボルデュック（ケベック外国宣教会）
	会津	会津若松、喜多方、南会津	會津 隆司（仙台教区）
	中通り南	郡山、須賀川、白河	佐藤 修（仙台教区）
	浜通り	原町、いわき、（湯本）	幸田 和生 司教（東京教区元補佐司教）

〈協力司祭〉佐々木 博、高橋 昌、佐藤 守也、首藤 正義

〈引退〉平賀 徹夫 名誉司教、鷹嘴 達衛、土井 勝吾

編集後記

皆さまのおかげで、ようやく今回も発行することができました。仙台教区報は、皆さま方の積極的な投稿で成り立つ参加型の機関誌だと思います。皆さまの日々の出来事などの投稿をお待ちしております。

投稿は隨時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

(上野 隆)

sendaikyoukuho@gmail.com

次号発行予定日：8月6日(日) 原稿締め切り：5月末日